

第11回人間科学研究フォーラム パネルディスカッション報告

合同会社春咲花代表社員 井上 浩一

島根大学医学部附属病院医療ソーシャルワーカー 村田 美咲

1. 医療・福祉・介護の現場から

淑徳大学結城康博先生の基調講演に続き、2名のパネリストより講演があった。両名とも本コースの卒業生であり、本コースの実習生が実習でお世話になる実習先機関の職員でもある。

最初の報告は合同会社春咲花代表社員井上浩一氏である。井上氏は本コースの初代卒業生で、本コースで行なっている地域の実践者を招いての授業である「人間科学地域実践入門」でも授業を担当している。

2人目の報告は島根大学医学部附属病院医療ソーシャルワーカー村田美咲氏である。村田氏は入職2年目、出雲市出身で島根大学人間科学部福祉社会コースを卒業し、新卒で島根大学医学部附属病院の医療ソーシャルワーカーになった。

以下、それぞれの講演について概要を報告する。

2. 「人材確保・定着について考える～ごく最近の出来事から～」(合同会社春咲花代表社員 井上浩一氏)

井上氏は、「人材確保・定着について考える～ごく最近の出来事から～」をテーマにご講演くださった。ちょうど本シンポジウムの準備が本格化する頃、事業所で職員の退職が相次ぎ、事業の継続自体を検討していた、というエピソードを起点にしてお話くださった。人手不足のなか事業の立て直しを図り、残ってくれた今の職員を大事にして少数精鋭でやっていくために①会社の方針の修正②カスタマーハラスメントへの対応を行っていた。そもそも、人間関係(対利用者&家族/対職員)、会社の理念や方針、待遇面(給与、休日など)、ハラスメント対応など、すべての事柄において「働きやすい職場」でなければ高齢者虐待のトリガーになりかねないとの危機感があったとのことであった。春咲花では立て直しの結果、現在は危機的状況を脱することができたそうである。

報告者である武子の所感として、ちょうど最近のお話ということもあり、リアルかつシビアなお話をおうかがいできたと感じた。ソーシャルワーカーは、心理的に利用者の選別をすることができない。養成課程でもそのようには教えていない。しかしながらそのような厳しい状況のなか、事業所の守るための戦略であったことが伝わってきた。井上氏はその葛藤を私たちに伝えてくださっていた。結城氏の基調講演と呼応するような、現場の報告であった。

3. 自分のしたい仕事は福祉の仕事だった(島根大学医学部附属病院医療ソーシャルワーカー 村田美咲氏)

村田氏は、将来は対人援助を行いたいと思って島根大学人間科学部に入学したこと、その中でも福祉は、本人だけではなく環境に働きかけるという点に関心を持ち、ソーシャルワークを選んだとのことであった。また、最初は精神保健福祉分野で働くことを希望していたが、身体疾患のある患者さんもケアしたいという希望から、総合病院でのソーシャルワーカーを希望したそうである。そして島根県に就職した理由については、自分の生活を疎かにしないためには環境の変化がない方がより良いと考えたこと、土地柄を知っていることはソーシャルワークを行う上で有効であることから、自らよく知っているご自身の地元を職場に選んだということであった。また、「島根の空気や人のあたたかさ」など、その雰囲気が好きで島根で働きたいと感じたということも印象的であった。

報告者である武子の所感として、20歳～34歳までの人口がどの世代よりも少ない島根においては、村田氏が島根を職場に選んだ理由は重要であると感じた。ソーシャルワークを行う上では地域を知っていることは、相談者の生活をその地域の文化ごと理解することにつながる。本コースの学生たちの多くが社会福祉士・精神保健福祉士資格取得を目指すためソーシャルワーク実習に参加する。その際も学生たちは事前学習において地域のことを調べ、実習に入ってから地域固有の取り組みや環境について学び続ける。本コースは山陰で実習を行っており、実習での学びを活かしての山陰への就職が可能になる。島根に就職する利点を学ぶことができた報告であった。

4. パネルディスカッション・来場者アンケートを含めての総括

パネルディスカッションでは、結城氏、井上氏、村田氏が登壇した。結城氏の指名によるフロアからの質問もあり、活発なディスカッションが行われた。井上氏は結城氏が提言する「職員ファースト」について、ご自身が行ったことは間違っていなかったことを確信できたとのことであった。

来場者アンケートでは、結城氏の新しい考え方に勇気づけられたコメントが多くあった。先生方のご協力もあり学生たちも多く来場していたが、学生たちも教科書とは違う話に感銘を受けていた様子であった。

今後も人口が減少し、他の地域に先駆けて少子高齢化が進んでいく島根において、医療・福祉・介護の人材を確保することは重要課題である。本コースも毎年ソーシャルワーカーを養成している。福祉ではなく一般の会社に内定していても、福祉に帰ってくるかもしれないからと資格取得を目指す学生たちを頼もしく感じている。しかしながら、この山陰において毎年30人未満のソーシャルワーカー養成では、需要に対して供給が足りているとは言い難い状況にあるのではないかと感じる。本コースでは今後も井上氏村田氏に続き、地域で福祉職を担ってくれる学生の養成のために、地域の社会福祉の団体・機関と連携・ご協力いただきながら、より一層教育に力を入れていきたい。

(報告：島根大学人間科学部講師・武子 愛)